せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第175号・平成16年4月1日

年表で読む 古平の歴史

《81》

古平の鱈漁

■二百年程前のタラ漁

古平でのタラ漁について最も古い文書によると、一七八〇年（二二四年前）古平の産物の中に『タラ油』というのがあり、一七九九年（二〇五年前）には『干タラ』が製造されている。

当時、古平は松前藩の領地として藩士に貸し与えられ、古平場所としてこれを預かっていたのは（知行主）新井田喜内という藩士であった。

しかし、実際に古平場所を経営していたのは、運上金と言われる、いわば権利金を払って経営を請け負っていた商人（近江八幡に本店を持つ岡田屋）で、その契約の文書の中に、

「・・・二両ハ鱈冥加金ニテ・・」

と、その時々の漁獲高によってある金額を納めていたことが記されている。

※この場合の冥加金（みょうがきん）というのは雑税の一種で、一般の税金のように定率がないものを言い、江戸時代には営業を許可されたときなどの謝礼としての意味がある。

■タラ漁の漁業税

明治六年（一八七三）、開拓使は乾鱈や鱈油から現品の二割を税金として徴収するようになり、明治一六年には大型川崎船七隻から、一隻に付き、乾鱈二貫五百目（九キロ）結び六〇束と鱈油四斗（七リットル）、中型川崎船二一隻からは同じく乾鱈四〇束と鱈油二斗六升余りを徴収していた。

■タラ漁の記録から

「日本物産字引」（明治六年）には「鱈は岩内、古平、積丹、与市、高島にて多く漁す」とあり、タラは古平の主要な産物の一つであったことがわかる。

また、明治三二年の「後志状況報文」に、「（古平の）・・・鱈釣川崎船四三隻アリ、ソノ漁獲二三〇石余（一七二トン余）ナリ」というようなことが見られる。

タラ漁場のことなどについては、七人乗りの川崎船でタラ漁をしていた記録によると、

「午後十一時古平を出帆し、午前七時、美国郡婦美村沖合いより、タラ縄を西方に向かって八十枚を配縄し、幌武意村はずれに達しており、この場所は美国、積丹のタラ漁の船も出漁しており、縄掛りがあり、漁業者間で問題を起していたようである」　（願雄寺古文書から）

鱈延縄漁業

新潟県	高橋源三郎	31歳	
同	本間権三郎	26歳	
古平郡	堀　玉造	24歳	
石川県	岡田勝太郎	26歳	
同	堀　玉吉	26歳	
山形県	土岐道次	25歳	

この頃の船頭は磁針を使い、山・岬・谷などを目標にし、縄に重りをつけて海底までの深さを測って延縄を入れた。未明に入れ、一時間程待って夜の明ける頃に引き揚げていたという。

古平町内に一枚しかないタラ漁の写真、陸が間近に見える⇦

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【76】

大正一一年

▼一二月二九日

雪が少々降ったが静かな天気だ。店は年末の掛け取りや支払いなどで忙しい。現金買いは無い。二日の売り出しを目当てにしているのだろう。リンゴ買いの客もポツポツあり、三円余り売る。今日は熊さんと出面一人が、農園の板倉の雪下ろしにいく。こんなに積るのも珍しく記憶にもない。小樽田の店員、美国まで集金に行って来たとて帰りに寄る。集金も思った程入金がなかったとこぼしていた。実際、商人は弱いものだ。

▼一一月三〇日

朝から雪がチラチラ降るが、割合いに暖かい。今年は大雪の割りには今までは暖かい天気が続いた。熊さんは掛け取りに出かける。全部で二三〇円程の集金があった。この二、三日、カレ漁はあったが、二八日勘定のため金回りが悪く、正月一五日払いに延期を申し込む。当町では全般に金融が非常に切迫している。殊に海産商の打撃が甚しいと聞く。自分等は見込み物などの売買はないので、儲けも少ないがこんなときには幾分気楽だ。例年だと、今月は銀行や組合から幾らかの融資を受けるのだが、今年は幾分かの預金があるのは実にありがたい。この後も大いに奮発せねばならぬ。羽生馬車屋と出面一人が来て、今日も雪引きをやる。雪引き賃で年内に三〇円もかかった。夜は正月支度で。台所の方は煮豆、かまぼこ、なます作りなどで忙しい。私は帳簿整理などをする。

▼一一月三一日

朝七時起床す。雪が降り寒い。馬車屋と出面が来て雪引きをやっていたら、九時ころから大吹雪になり、とても仕事にならないので中止した。熊さんは新地方面へ集金に出かけた。店は年取りで何もかも忙しい。私は神棚の飾りやらいろいろ厄年の支度をする。吹雪はますます激しく、板戸を閉めた。五時に茶の間に座布団を敷き、幸、文、吉、トミ、悦三等五人の珍客さんにお膳を据えてご馳走が出た。子供等五人大ニコニコ、大喜びだ。座布団に座り、嬉しそうにして揃っているところを見ると実にかわいらしいものだ。こうして家内むつまじく、壮健にして年をおくり、新春を迎えられるとは実に何よりの幸福だと思う。世間には物質上の不足が無くても、家庭不和とか病人があるとかで心配のある家も多いが、私の家は皆が壮健で、平和でこの一年を過ごしたことは、実に神に感謝せねばならぬ。夜十一時頃、父は西の宮（浜町・恵比須神社）当番になっていて行く。

大正一二年

▼一月一日

一陽来復、大正十二年の新春を迎えた。昨年中の幸福を感謝して本年も幸多かれと願う。朝から大吹雪で寒さも厳しい。父は昨夜十二時から恵比須神社の当番でお宮へ行っている。私は七時起床、宮参りは恵比須神社へ行き、九時半、学校の拝賀式に参列した。終わって、交礼会場の裁縫室に集まり祝杯を挙げた。帰り支店、困、㋕、虫、㋝、太などに寄り回礼をする。明二日は初売りなので店の片付けやら景品の支度をし、十時頃休む。

▼一月二日

昨日からの大吹雪は、元日の夜になって一時静かになったが、朝の四時頃からまた大吹雪に変じ、板戸を打つ音や二階などはミシミシする程の大吹雪になった。この分なら二日も余り人出がないだろうと七時頃まで休む。七時半頃、㊐藤井さんから電話があり、網六〇〇間の注文がある。初商いだ。八時頃からポツポツ来客があり、十時から二時頃までが一番忙しかった。相坂さんと出面一人を手伝いに頼む。予想以上の客があり、売り上げもかなりあった。合計で九二五円、不況の中なので、三、四〇〇円あればと思っていたら全く

予想外に良かった。この分だと今年も刺網は相当の売れ行きならん。大吹雪のせいか美国、積丹方面からの客は無かった。

▼一月三日

今日も朝から大吹雪、そして寒さも厳しく寒暖計は二十八度F（マイナス二・二度C）、硯の水も凍っている。近頃で一番の寒さだ。昨日の疲れで九時に起床し残務整理をする。リンゴ買いもポツポツ来て五円程売る。年賀状の出しもれを書く。熊さんは昨日の景品配りやら、寺への用向きで出かける。寒気が厳しく裏に置いた漬物が凍ったので、熊さんと倉へ六樽も担ぎ込む。夜、向かいの電気会社に青年連中が集まりカルタ会を始めている。大声が聞こえ元気だ。板戸を閉め、店のこたつに入っていても声が聞こえてくる。

▼一月四日

朝からずい分寒さが厳しい。そして吹雪。十時頃銀行へ行き一、〇〇〇円預金する。後、正、郷社、成田山、八、傘、平、田、翔などに年始に寄る。十二時ヨに着き、酒肴、昼食を馳走になる。一時間程も居り六時に帰る。夜、太へ遊びに行き九時帰る。

▼一月五日

今日は少し寒さがゆるむ。新年度の通帳を配布するので上書きをする。店は閑散、リンゴ買いの客が来るぐらいだ。カレ網も出たが途中から戻ったとのこと。正月に入りまだ一度もナギの日がなく、魚も払底している。妻と父は近所へ年始に行く。夜、㊋で部落会の会合があり行く。いろいろと話をして酒肴を馳走され九時に帰る。静かな月夜、明日は上天気ならん。この夜、例年のように困から新年の招待を受けたが、部落会があったので行けなかった。

▼一月六日

今日は珍しく静かな暖かい天気だ。三十一日以来、毎日のような寒さと吹雪であったが、今日初めて春らしい気分がする。父は新地方面へ年始に行く。店は閑散、熊さんは通帳を配布に行く。五十冊程を配る。のどかな天気模様なので、久しぶりに悦三とトミを連れて浜へ出て見る。カレ網、タラ釣り、磯まわりなどは皆出ている。悦三は天気は良いし、あちこち歩いて面白いのか大喜びだ。東洋製網へ網を一万間注文した。夜、安藤から「オタルユキフネアルナワイラヌカ」と電信が来たが、まだ手持ちがあるので「アトタノム」と返電した。

▼一月七日

今日も快晴、そして暖気になった。東洋製網へ網一万間の注文の電信をやったら「シタイトタカイ七二〇」と返電が来た。今日は七日なので七草の馳走がある。港町の姉が子供達を連れて遊びに来る。それに困の三郎さん、常雄さん、賢ちゃん、家の子供達が加わり、十四、五人からの人数になった。茶の間にお膳を出して白酒、サイダーにそばを馳走する。皆喜んでいる顔を見るのも楽しいものだ。食べ終ると相撲やらトランプ遊びなどをして、五時頃帰る。

▼一月八日

今日も天気快晴、漁師連中は皆出た。店は沖村、入船町方面からアバ縄、刺網などの客があり、八十余円を売る。文治が餅つきの頃から耳が痛いと言って、正月中も耳が聞こえないというので心配になり、小樽へでも連れて行こうかと思っていたら、二、三日前から良くなったと言って元気になったのでまず安心した。雪も降らず天気も良い。実にのどかな空模様であった。子供達を連れて浜でタコ揚げをしたが大喜びだ。三時頃、上ナギの海上を大漁旗を立ててカレ網が入港して来た。他の船も漁があったとのこと。浜は大忙しで活気づく。引き続き大漁であらせ給えだ。リンゴは毎日三～四円くらいが売れる。夜、亥之吉方で五歳の女の子が死んだと言うので、父がお悔やみに行く。静かな夜だ。

▼一月九日

今日は雪が降り時々吹雪く。そんな中で、子供達はタコ揚げをやると言って浜へ行く。自分等の子供の頃は電気や電信の柱がこんなに無かったから、町中でタコ揚げができたが今では町中ではタコは挙げられぬ。亥之吉さんのところへ妻が朝から手伝いに行く。夜、父は亥之吉さん宅へ通夜に行く。熊さんと幸治は新地へ活動写真（映画）を見に行く。

（続く）

―父と大福もち―

大澤文子

大正十二年四月、私は、新潟師範付属小学校の一年生になった。

入学当時テストがあり、細い平均台の上を渡らせられた。それも大きな紺色の風呂敷包みのやや重いものを持たされて…。平均台の上から落ちないように渡らなければならない。運動神経を見るためであろうか。

幼い子供達にとっては至難のわざである。親達のハラハラする目の前での真剣勝負だった。

私は平均台の上から風呂敷包みもろ共二回程落ちた。だが入学は許可された。冬には二歳上の姉と共にスキー選手になったのに…。

翌年の大正十三年四月には、佐渡高等女学校に父は希望して転任したのだった。私は佐渡の小学校二年生になった。どうゆうわけかすぐ副級長に任命された。受持ちの先生はたしか、小菅タマ先生だった。

大正末期ではまだ洋服を着て登校する友達はなく、皆、元禄袖に短い袴をつけていた。

私と姉はお揃いのドンブリ型の帽子をかぶり、母の手製だったお揃いのピンク色のサージのワンピースを着て通った。途中、父の勤務する佐渡高等女学校があった。大正時代の女学生は、ねずみ色と黒の編模様の着物にえび茶の袴をつけていた。

私達幼い姉妹が女学校の脇を通る度に、女学生は校門の柵にしがみつき「アレアレ、今井先生の嬢チャンや見てェ見てェ」と、黄色い声を上げ手を振ってくれる。

私と姉は恥ずかしくて、時には裏道を遠回りして行くこともたびたびだった。

父は佐渡へ渡ってから、自転車乗りの稽古を初めた。たしか三十七、八歳歳の頃であったと思う。日曜日になると必ずと言っていい程、石ころの多い坂道を夢中になって練習していた。

また、練習かたがた遠く隣町までも行き、大福もちを買って来るのが日曜日の父の仕事のようになった。

時には「あらあら大変よ！」母のかん高い叫び声に、私と姉は玄関に飛び出るのだった。

無残！　父の膝から痛々しい真っ赤な血が滲み出ている。大福もちは甘くておいしいが、かわいそうだなァといつも思った。次の日曜も、また次の日曜も父の自転車の遠乗りは続き、そして、おやつは大福もち。

佐渡の家々には狭い庭が多かった。垣根越しに紫のつゆ草がどこの庭にもよく見られた。女性的な花…。つゆ草が印象深く、今でも、佐渡高等女学校の生徒さん達のやさしい笑顔と共に、懐かしく、私の脳裏をかすめるのだった。

父の希望転勤はまたまた続き、一年後の大正十四年四月には、津軽海峡を渡り札幌市に住むようになった。

姉と私は、父の勤務する札幌師範学校付属小学校の五年生と三年生になった。新潟、佐渡、札幌と三年間も続けて…と、父の希望転勤のことは知るよしもなかったが…、私と姉はすぐ札幌の小学校の生徒として順応できたのであろう。別にどういうこともなく、学芸会には母の手製の水色のだんだん服を着て遊戯にも出演し、作文の時間にはいつも師範学校の教生先生が、私の作詩した何編かを印刷してほめてくれたことを記憶している。

ただ、今でも脳裏に深く刻み込まれているのは母のこと。

「もう箪笥なんていらないねェ、引っ越しがたびたびで大変でねェ」

母の口からもれる愚痴も否めない事実であろう。

札幌へ来てからの母は、冬を迎える度につらそうに見えた。北国の寒さに負けたのであろう。指先にあかぎれができ、ひび割れた指先にはいつも軟膏を塗りつけ、赤く焼いた火ばしで「あちち、あちち」と言いながら手当てをしていた。床柱に寄りかかりながら、「あちち、あちち」と言うたびに、母の額に細かい皺のできるのが子供心に悲しかった。あかぎれと母…。思い出は悲しい。

戦中戦後

泣き笑いの樺太漁場体験記

吉野慶一郎

ソ連兵も歌の輪の中に　現実に敗戦というショックや、進駐という思わぬ事態から町民も途方に暮れ、不安に押しつぶされそうな生活の中で娯楽にも飢えていたとき、この町民有志の若い人達による演芸会は全く予想外の大盛況でした。

その興奮に包まれている中で、観覧していたソ連兵達から「われわれにも歌わせてくれないか」、という申し入れがありました。もともと陽気なソ連人のことですから、早速飛び入りでロシアの歌や踊りが舞台いっぱいに繰り広げられました。

これでまた会場のムードも一気に高まったようで、ならばこちらも負けじとばかりに、プログラムには無い『花笠音頭』やら『ソーラン節』などを披露しました。

こんな雰囲気で、ソ連兵との日頃のわだかまりも幾分かは消えたようで、しばしはたまっていた生活の苦痛も忘れ、友好的な気分にひたったひとときでした。

『さらば野田町』を全員で合唱　そして最後に、ぜひにと用意した歌『さらば野田町』、いつになったら帰国できるか分からない日本をしのび、そしてその日が来た時には、住み慣れた野田の町に別れを告げる気持ちを込めた歌でした。

この歌は、戦時中から流行していた『さらばラバウル』の歌詞を作り替えた替え歌です。その中の一節、

…恋し故郷
あの空見れば
松の木陰に北斗星

本歌は、
「椰子の木陰に十字星」
という具合でした。

全員で歌っているうちに、いつの間にか客席では全員が立ち上がり、ついには涙の大合唱となり、それが……いつまでも続いたのでした――。

終わって別れ　やがて演芸会は「またネ」も終わり帰る間際には、笑顔で、
「とてもよかったヨ」
「みんな上手だったネー」
「またやってネー、おかげで元気が出たヨ」
などなど、一番聞きたかった嬉しい言葉ももらい、改めて娯楽の大事な意味が身にしみました。

後は疲れも忘れ、舞台の後片付けをしながらみんなで今日の成功を喜び合いました。

そのときです。厳しい顔をしたソ連軍の将校二人がずかずかと舞台に上がってきました。何事かと、一同は緊張し顔色が変わりました。

『ふるさと一〇〇話』

先年末のこと、総務省からそれぞれの地域に語り継がれている、ふるさとの発展や住民に貢献した、或は献身的な行為や美談があれば、それを『ふるさとの伝えたい話』として発掘し、全国に紹介したいという連絡がありました。全国から一〇〇話を取り上げ小・中学校に配布するということでした。

古平町でも、今は知る人も少なくなってきましたが《シコロの木》にまつわる、出羽丸遭難の時の町民挙げての献身的な人命救助活動があります。戦前はよくそのことが話題になりましたが、いつしか人々の記憶からうすれていってしまいました。

今回、その美談をふるさとに伝えたい話として応募したところ、全国からの一〇〇話に選ばれ、すでに本が出来上がって来ました。

文化会館図書室にも一部置いていますので、お出での時はぜひご覧ください。

―札幌通信 第16信―

三角の丸山

吉川義雄

優しい小山だ。正確な高さは今もって知らないが、約二百米と子供の頃誰かから聞かされ、今だにそう思っている。

海に突き出た丸山岬でどうやら古平湾が構成され、やたらに荒っぽい北西の風と波で、町が苛められるのを防いでくれている。

不思議な山だ。地質学者ではないから、海の中にどうして突き出して出来上がったか分からないが、地続きのハゲ山から、どうして緑濃い山が海の中に在るのかと思う。

春には、山桜まで数多く咲いて楽しませてくれた。あまりにも身近な山だから、子供達の格好な遊び場となるはずだが、私の知る限りどこの親達も「丸山に登るな」と、厳重に言い聞かせていたようだ。

子供達も、丸山の頂上を征服したところで誰からもほめられないし、仲間の誰もが登った気配をみせない。

それに親ばかりではなく、大人達全部がウルサイ存在だった。わが子と同じように、他人の子供でも悪行を許さなかった。自分の子供を叱るように容赦しなかった。

札幌に来て、近くの高校生の一群が歩道いっぱいに自転車を置き、アイスキャンデーを売る店先で雑談しているのを見つけ、大声で古平の親父魂を発揮したところ、みんなアッケないほど素直に従ってくれた。以来、その辺りは整然と秩序が保たれるようになったのには、私の方がむしろアッケにとられている。

ほんとうに登る気になって丸山に登ったことが一度だけある。戦後、古平町史のハシリを書くことになり、うるさく「古平烽火所」のことを言われて、実地検分のためであった。

このことは「せたかむい」11号と12号に詳述しておいた。今、古平では「烽火所」伝説をもとに、登山道までつけて看板をあげていると聞く。山頂に、下手な伝説を積みあげないでほしいと願うものである。

温泉側は山頂に登る一番楽な斜面だが、少々キツイが丸山に登るたった一つだけの谷伝えもある。登り口になるのは、焼けてしまったが恵比寿神社のウラからで、ほんの少し登ると、丸山には珍しい背丈の高い木々が茂っている。そのためでもあろうか、鳥の巣があきれる程ある。

必死に巣を守ろうとして鳴きさけぶ鳥を尻目に、悪童達は巣をこわし、卵を叩き割って木から降りてくる。

幼い頃、鳥達に何度も手元から巣子を略奪された経験者ばかりだから、やることに容赦はなかった。

町の人達が、毎日見慣れている丸山の姿も裏側から見ると、全面崖の厳しいもの。永い年月、風雪から町を護ってくれていたことがよく分かる。表側にも崖が一か所露出して、木の生えることはない。

新築移転された今の小学校に今もあるだろうかと、時々思い出す絵がある。中川先生の描かれた丸山の油彩画である。小学生の時以来だから、随分遠い日の想い出である。

校長室だったか、応接室だったか、あまり大きな絵ではないが、額縁からハミ出しそうな青緑の丸山の絵が飾られていた。

知り過ぎている山だから、絵の好きな私でもこの山を描こうともしなかったが、以後はセッセと描き出し、中川先生を尊敬した。

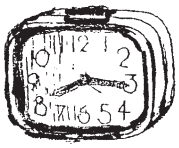
戦時中と戦後の少しの間、薪にするために、心ない人達が山の木を盗伐したようだ。真夜中にバリバリと音を響かせ、山頂からウラ側に落とし、翌日、舟で運ぶのだと聞かされたことがある。

風雪に耐えた灌木に覆われて丸みを帯びていた山が、三角に変貌したことは確かだ。山頂をこれ以上鋭角にしてはなるまいと思う。

いつの頃からか、昔の人が名付けた『丸山』を大切に護ってほしいと念じている。

母と霊感

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所　勤務）



青函連絡船で眠れぬ一夜を過ごした私は、雪が横なぐりに吹きつける青森駅で特急列車に乗り継ぎ、青森・弘前・能代・秋田と過ぎ、雪に埋もれ、地吹雪が猛け狂う酒田に着いた。

駅を降りた私を迎えてくれたのは、何故か義兄（姉の夫）だった。

しかも深刻な顔で。

やはりダメだったのか。

瞬時にこう思った私に、義兄は震える声で

「母は、息を引き取ったよ」

と言うや私に背を向け、肩を丸めてすすり泣いた。

私に悲報を知らせるのが忍びなかった義兄のつらさが、痛い程伝わった。

家にたどり着いた私をを待っていたのは、顔を白布で覆い冷たい体になってしまった、もの言わぬ母の姿だった。

看病にあたった姉は、目を真っ赤に腫らし

「こんな事になってしまい申し訳ない」

と言っては泣き

「おまえが来るまで生きていてほしかった」

と言っては私にしがみつき、泣き崩れるばかりでした。

親戚や会葬者が見守る母の枕元で、年甲斐もなく姉と泣きあった私は、母の死亡時刻を聞いて愕然とした。

『昨日の朝、八時十五分』

との事。

それは、私が稲倉石鉱業所の事務所で、母の妄想にかられていた時刻だったのです。

偶然の一致だろうか。それとも西国に旅立つ母からの霊感だったのだろうか。

神仏・霊感など一切信じなかった私ですが、この時だけは今考えても身震いする程、不思議な事象だったのです。

思えば四人兄妹の中で、私だけが遠く親許を離れていたせいか、殊の外私に思いを寄せ、衰えた目をこすりながら書いてくれた、五センチ四方程の大きな字で

サミシクナイカ
コドモハゲンキカ
オマエモタッシャカ
ハヤクカエッテコイ

と書いた一枚の手紙に、子供の赤い手袋や、線香花火を送ってくれた優しい母だったのに。

転勤を言い渡された時、寂しいとか、悲しいとか、親元を離れるのがつらいなどと思った事はなかったが、貧困の中で私たちを育ててくれた母の死を見守ってやれなかった悔しさが、胸に突き刺さる思いだった。

大きくなった孫を抱いてもらいたかった。

何時も痛いと言っていた母の肩を揉んであげたかった。

枕を並べ、昔の苦労話を語り明かしたかった。

つのる思いがとめどなく浮かんでくる。

やはり、親と子は身近かで生活し、ともに喜び、ともに悲しみたいと思った。

サラリーマンの宿命と云えばそれまでだが、私にとっては引き返す事が出来ない、余りにも高価な痛恨事だった。

×　×

葬儀の日。

私は見栄も外聞もなく、声をあげて泣いてしまった。

（おわり）

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

17　橘　義春

銃剣術　～続き

2．身長の足りないハンディを克服するにはどうしたらよいか？　私は凝り性なのでさんざん考えたのが、背の低い分だけ飛び跳ねたらどうか。それにより高い位置から相手を突くことが可能だ。

「これだ！」

銃剣術は相手を攻撃する場合、前へ、前へとすり足で「ツ、ツ、ツ、ツ」と進み、そして、木銃を水平にしてさっと出して相手の胸を突くのが基本の型だが、私のやり方は、木銃を相手の胸にさっと突き出す瞬間に『ぴょん』と四〇センチ程も跳び上がり、斜め上から胸を狙って突いていく。これだと相手よりも高い位置にあるので有利になる。基本の型というのは規則にはないので、これを無視してもルール違反にはならない。少しばかり格好は悪いが、要するに勝てばいいのだ。発想の転換とでも言おうか。

私は、ひそかにこの二つの組み合わせをした銃剣術の練習を始めた。中隊の銃剣術の練習で初めてこれをやったら、坂東准尉に「橘、お前の銃剣術はウサギ剣だ」と言われた。

なる程、うまい表現だ。飛び跳ねるからウサギ剣か。でも次から次と相手を倒したので、やめろとは言わなかった。かえって相手を倒す度に「攻勢の上胴！」と一声、勝ちの判定を下した。

「試合始め！」の号令がかかるやいなや、奇声を張り上げていきなり突進し跳び上がって突く戦法には、対戦相手も変な型破りの銃剣術にさぞてこずったことだろう。

ピョン、ピョンと飛んだり跳ねたり、まるで京の五条の橋の上の牛若丸のようだ。手段はどうでも勝つことだ。この戦法を使って、今まで負けてばかりいた同年兵にも勝てるようになった。これですっかり銃剣術も好きになり、下士官室の隣の空き部屋で夕食後、戦友達を誘ってはほとんど毎日のように練習に励んだ。初年兵などは体がすきだらけで、まるで子供を相手にしてやっているようなものであった。

軽機関銃の中谷班長は、私と対戦する同年兵小松茂に小声で「橘に気をつけろ。いきなり吹っ飛んで来るからな」

と注意を与えていた。小松茂は小柄だが、運動神経が発達していて非常に動作が敏捷であった。銃剣術では彼に負けてばかりいたが、それがいつの間にか形勢が逆転して私に歯が立たなくなった。

松山敬三上等兵が私の真似を始めたらしく、二人で戦っているとまるで軍鶏（シャモ）の喧嘩だと戦友達は腹を抱えて笑う。

よもやま話

★つわもの荘

私達の駐屯している町、気屯は小さな町で、休日に連隊の兵隊が一度にどっと外出すると町が兵隊であふれてしまう。店も食堂も二、三軒で行くところもなく、ただ町をぶらぶらして兵舎に帰るだけだった。

ところが、町に兵隊達の休日の憩いの場・つわもの荘を作ろうという協力者が現れた。敷香町で土建業を営む栗山順次郎さんで、国境の軍道作りにも協力した人である。その方のおかげで気屯の町にも兵隊達の〈つわもの荘〉が誕生した。

だが収容人員に限りがあるので、休日をずらし日曜日は第一大隊、月曜日は第二大隊、火曜日は第三大隊とした。これで町に兵隊があふれることもなく〈つわもの荘〉で飲食ができ、一日を楽しめる休日の外出が何よりの楽しみになった。

『連作』

古平まで

坂本甚衛

（四）

――あれは何年前になろうか？　七年、八年、否、十年以上はきっと前になる。

初夏の、とある午後遅くだったと思う。私は余市駅のベンチに座っていた。なんで駅にいたのかは、今もって判然としない。古平に住まいする当節ならバスを待つ間ということもあろうが、当時は余市に住んでいた。多分駅舎の壁際の本棚に並んでいる、貸本の類いでも物色していたのではあるまいか。

ちょうど列車が着いたとみえてベルが鳴り響き、ひとしきり乗客が目の前を通り散っていった。一拍後、表示してある大きな絵入りの地図を見つめていた中老年世代の婦人が、私の隣に浅く腰をかけおずおずと問いかけてきた。

「あのう、この辺の近くの海岸に有名な岩があると聞いて来たんですけど、どっちなんでしょうか？」

「岩っていうと、蝋燭岩かな。それなら・・・」

途端、婦人の顔がいきいきとしてきた。

「あっ、それです。確かそう聞きました」

私はバス停を指差し、うながし立ち上がった。しかし、美国行きのバスは出たばかりで、次の便には大分時間があった。よしんば順調にバスがあったにしろ、潮見町で下車、見物後折よく帰りの便があればいいが、それもどうかは疑問である。ぐずぐすしていると日が暮れる。

私は心許ないバスよりもタクシーをやや婉曲に勧めた。婦人の懐具合もあろうか、と思ったからだ。さっきから話す言葉のイントネーションをいぶかしみ私は尋ねた。

「小母さんどっから来たの」

すると、

「名古屋からちょっと行ったところです」

との予期しない返答だった。

「そりゃ、また随分遠いなぁ。よく蝋燭岩の在り場所なんか見つけて来たもんだ」出来るだけ北海道弁を殺し、標準語を用いようとする自分がいた。

いくら観光客といえ精々道内程度としか考えていなかったのに。本州も中部以南となると、これはもう余程の通と言わざるを得ない。装いを見てもこざっぱりとはしているが、そんじょそこらのばっちゃんがスーパーへ買い出しに、といった格好である。手にした小さな旅行バッグが旅慣れた風情を醸しだしているといえばいえたが、ただそれだけの話である。

婦人はバス時間表を眺め、私の話を聞くと、今日は長旅で疲れたから、あそこへ泊まって明日ゆっくり行きます、と前の旅館に目をやった。それがいい、と私も賛成した。

名古屋近辺から遥々来るという情熱は凡そ半端ではない。この北国の半島に魅せられた老女の一途な旅情、その心根とは一体如何なるものだったのか。

「名古屋の近くってどの辺です？」

手持ち無沙汰に私が問い質すと、

「四日市の手前で川越というところです」さらりと言った。

「ほおぅ、伊勢湾沿いの・・・長良川を渡った向こうの・・・」

「ご存じなんですか？」

と言うので、

「うん、ちょっといたことがある。名四道路と松阪競輪の場外車券売り場に挟まれた一部だったかな」

偶然の符号に驚きつつ私が返答した。

二人を隔てていた他人のぎこちなさがとれた。婦人はいささか得意気に口にした。

「実はわたし俳句をやっているんです。その岩を見て一句出来ないかしら、と思ってやっ ⇦

俳句鑑賞

句碑二題（二）

お楽しみコーナー　12

俳誌 悠 主宰　水見壽男

ふるさとを同じうしたる秋天下　素十

高野素十は茨城の人。大正から昭和年代ホトトギス四Sの一人、即ち四天王と称揚された俳人です。ある時期には虚子の後継者に目された時代もあったとの伝聞もあります。

生涯を写生また写生と、徹底的に写生を基礎に虚子の客観写生を信奉、ある時期の句作について草の芽俳句の祖と揶揄されたこともありました。

素十については、先に紹介した『郷土の石碑散策』にも詳しくふれています。

素十は、東大医学部時代に俳句に手を染めました。勿論師は虚子で、仲間に工学部の山口青邨がいました。四Sの命名は青邨ですが、実は水原秋桜子を俳句に誘ったのは素十だったのです。東の素十・秋桜子、西の青畝・誓子の頭文字をとって四Sと命名したのですが、素十の畏友でもあった秋桜子は昭和の初めにホトトギスを離れ、間もなく誓子もまた秋桜子に続くという事態が起きました。

甘草の芽のとび〳〵のひとならび　素十

ばらばらに飛んで向ふへ初鴉　素十

素十と、秋桜子の句を並べて見ましょう。

梨咲くと葛飾の野はとの曇り　秋桜子

瀧落ちて群青世界とどろけり　秋桜子

両俳人の句を並べてみると、俳句の資質の違いが明確に感じられます。

素十の句には硬質で正確な写生の味わいがあり、秋桜子には情感をからめた質感があります。共に医学部出身ながら素十は法医学を、秋桜子は産婦人科を専攻しました。

素十は『芹』、秋桜子は『馬酔木』と、共に俳誌を創刊しましたが、芹はその後廃刊、馬酔木は息子の春郎が継承しています。

素十は、芹で力強く選句の腕を振るいました。雑詠、投句十句で厳選を極め、巻頭でも三句五句のことが多かったと伝えられています。

昭和五十一年十月、八十三歳で逝去。しかし、芹の連衆は芹一辺倒であったため、素十死後、芹は廃刊となり、会員は路頭に迷うところとなり、若干の後味の悪さが残ったと友人から知らされました。

俳誌運営の難しさを知らされる一事です。

⇦て来たんですけど・・・」

「吟行ですか？　そりゃ、また」

私はがぜん興味をそそられ、その小旅行に同行し説明役を買って出ようかと思った程だが、あいにく翌日は仕事だった。

俳句の基本は写生にあるというが、果たしてこの婆さん、蝋燭岩を目前にしてどんな句を捻り出せるんだ。世の中には物好きな御人もいるもんだ。だが待てよ、侮ってはいけない。稀有な才能に恵まれた俳人かも知れない、と私は頭を切り替え自分を戒めた。

積丹半島の奇岩中、蝋燭岩はけだし随一に違いなかろう。ワッカケ隧道を余市側より古平方面に抜けた瞬間、鉛色の海中から突如とそそり立つ孤岩の風貌は慈母観音にも似て、見る人を圧倒する。ひとり道内のみならず、広く全国の端々まであまねく知れ渡る価値は十分にあると思うのだが・・・・。

（続く）

短歌

古平町岬短歌会

米寿へなほ年迎ふ楽しみに孫の佳き日を数へゐるなり　池田テル

うからとのハワイの旅を偲びつつ期限の切れし旅券また蔵ふ　鈴木時子

夫の里七軒町は山菜の豊富な処春くれば思ふ　竹内コト

ふみしめて歩く雪道雲切れて我が影長く車道に伸びぬ　東美知

堅雪を踏みしめ登る摺鉢山パーティーは焚火と肉と歓声　寺内りよう

春荒れは覆ひし黄砂流しゆき戸外の景色際やかに見ゆ　丹後初江

日差し浴び雪の表情変りゆく暖かくも見え柔らかくも見え

年重ね飾る雛（ひひな）と桃の花今鮮やかに幼な日思ふ　田中香苗

水槽の魚らの動き或る時は日舞のごとしダンスのごとし

朝（あした）より牡丹雪ひら舞ひ降るを肩に受けとめ町に出で来ぬ　堀典子

俳句

古平俳句会

雪掻のつかれをいやし山の温泉へ　斉藤波留

ファッションで女ばっちり春を行く　山口悦子

雪解風乗せし鴎の羽根軽し　越野敏雄

春立ちぬとはまだ遠し北の果て　大和田絵伊

外灯の点りて雪の白からず　福井幸平

雪雲が雪雲を呼ぶセタカムイ　高橋重子

柔道着一礼深く寒稽古　仲谷比呂古

早朝の日差しを受けて冬木立　室谷弘子

綿雪や車が人を気づかひて　泉清三

春霖に日毎に変る山の景　外山俊久

雪明り道なき道の道しるべ　渡辺嘉之

打ち上げる波が砂這ふ春の浜　堀典子

日本海たっぷり春に浸りゐる　越野清治

古平町史年表

昭和6年 (1931)

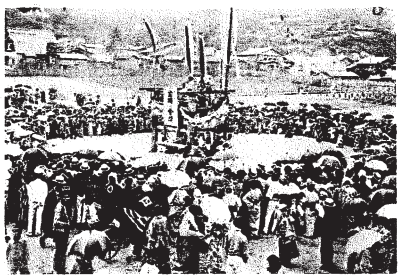
▲新潟県人会が禅源寺で行われ、80余人が出席する
▲暴風のため電話・電信が不通となる。鰊刺網が多数流出する被害が出る
▲スケソウが大漁、1隻で1万尾も漁獲した船がある
▲大暴風雨で増水し多くの橋が流され、古平橋も危険となる。沢江・土場方面に被害が大きかった
▲泥の木森林組合が設立される
▲メートル法実施に伴い、役場で説明会が開かれる
▲池田北海道長官が余市から自動車で来町する
▲古平青年訓練所の運動競技や弁論大会が行われる
▲近海汽船㈱主催の周遊団が竹島丸で来遊し、舟遊びや盆踊りなど全町挙げて歓迎する
▲未明に丸山町の民家から出火し7棟9戸を焼失、老婆がが1人焼死する
▲在郷軍人会古平分会と古平連合青年団が合同で満蒙問題についての講演会を開く
▲道路愛護デーの行事として、道路清掃や側溝整備を行う
▲浜町森林防火組合の発会式が行われる
▲観音滝祭りの帰途、酔って川に落ちた1人が死亡、1人がけがをする
▲在郷軍人会古平町分会がススキナイで射撃大会を行う
▲飛行機から茅沼炭の宣伝ビラを撒き、町民は大騒ぎをしながらビラを拾う
▲浜町の民家から出火し、火元の1戸を焼失する
▲古平橋が竣工する。渡橋式が行われ浜町・田附、丸山町・堀両家の三夫婦が渡る
▲鰊不漁に加え、冷害のため水稲の収穫も皆無となる
▲鴨居木分教場保護者会では困窮児童に学用品を給与する
▲石狩湾での中型底引き漁業の禁止区域について、漁業者間で協定が結ばれる
▲鰊不漁と凶作に見舞われ、政府払下げ米の配給を受ける
▲浜町に蓮実医院が近代的な建物が新築し評判になる
▲入船町種田富太郎がかまぼこ製造を始める

昭和三年一月

古平新潟縣人會々則

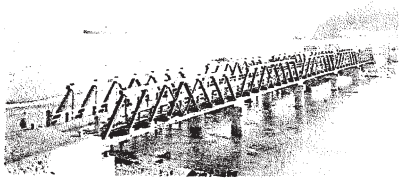
➡ 古平新潟県人会会則と名簿

⬆ 周遊団を出迎えする人達



⬆ 歓迎の盆踊り風景

⬆ 渡橋式で式辞を読む武田町長



⬆ ポニートラス式の古平橋